

2) 五重塔

四天王寺のシンボルとも言うべき五重塔は、創建以来、7回の建て直しを経ており、現在のものは、戦後の1959年（昭和34年）に再建された8代目の五重塔です。

2か所あるうち北側の入口は開放されており、螺旋階段で上層部まで上り、内部に納められた舍利塔を拜むことができます。

南正面には釈迦三尊の壁画と四天王の木像が祀られています。

なお、五重塔には、聖徳太子が四天王寺を創建した際に、塔の心柱の中に仏舎利6粒と自らの髻髪（きっぱつ）6毛を納めたという伝承が残っています。

五重塔は聖徳太子が創建時に六道（地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上）利救の悲願を込めて、塔の礎石心柱の中に仏舎利六粒と自らの髻髪（きっぱつ）六毛を納めたので、別名「六道利救の塔」ともいわれています。

四天王寺五重塔の高さは39.2m、相輪の長さ12.3mあります。内部には四天王像と釈迦三尊の壁画が安置されています。また北側の降り口からは中に入ることができ、最上階から大阪市の眺望を楽しむことができます。

五重塔のほか1961～1963年（昭和36～38年）に再建された金堂や講堂なども登録文化財になります。

昭和の再建

昭和9年（1934）9月21日、近畿一円を襲った室戸台風によって五重塔が倒壊、金堂は傾斜破損、仁王門（中門）も壊滅するなど、境内全域が相当な被害を被りました。昭和15年（1940）、努力のすえに五重塔が再建されましたが、それも束の間、昭和20年（1945）の大阪大空襲により、六時堂や五智光院、本坊方丈など伽藍の北の一部の建物を残し、境内のほぼ全域が灰燼に帰してしまいました。しかしこの時も、各方面の人々の協力を得て復興への努力がなされ、昭和38年（1963）には伽藍が、昭和54年（1979）には聖霊院奥殿・絵堂・経堂が再建、その他の建物も次々に再興され現在ではほぼ旧観に復しています。さらに、戦後間もなく太子創建の寺であることから天台宗から独立し、和宗を創立。四天王寺はその総本山として、仏法興隆と太子精神の高揚を本願とする寺として再生いたしました。また、四箇院事業も、学校法人四天王寺学園を経営し、国際的な視野のなかで仏教教育を実施し、社会福祉法人四天王寺福祉事業団を中心に悲田・施薬・療病の各事業を継承発展させています。

